

議 事 録

会議名称	第3回小松市未来型図書館等複合施設基本計画策定アドバイザリーボード
日 時	令和6年9月12日(木) 16時～18時
場 所	小松市役所4階403会議室、オンライン
出席者	(敬称略・順不同) アドバイザー2名 安岡 美佳氏（デンマークロスキレ大学准教授）※オンライン参加 吉田 良晴氏（九九谷代表） 事務局（市長公室未来型図書館づくり推進チーム） 横山、高橋、竹内、中山 支援業務受託者（アカデミック・リソース・ガイド株式会社、株式会社日本総合研究所（以下「JV」）） 李、有尾、西谷 ※オンライン参加
次 第	1. 基本計画の策定について（図書館・博物館機能を中心に） 2. 第1回リビングラボオンライン開催報告及び第2回リビングラボ開催速報 3. 第3回リビングラボ企画案について
配布資料	【資料1】複合施設機能の概要図書館機能「知の集積」 【資料1-2】基本計画の図書館機能に係るアドバイザーのコメント及び回答 【資料2】複合施設機能の概要博物館機能「地域の歴史文化の集積・編集」 【資料3】第1回リビングラボオンライン開催報告 【資料4】第2回リビングラボ開催速報 【資料5】第2回リビングラボ（オンライン開催）について 【資料6】第3回リビングラボ企画案について

＜会議内容は下記のとおり＞

1. 議事

(1) 基本計画の策定について（図書館・博物館機能を中心に）

資料1に基づき、J Vより説明。

【主な質疑応答・意見交換】

J V 李	資料については先般お送りし、アドバイザーのみなさまにご確認をいただいた内容を一覧化し、回答・対応を追記して、資料にまとめている。
安岡氏	気になる箇所や、より議論を深めたいと感じた箇所にマーキングを行なった。これまでも北欧の紹介をしたが、良い面もあるが、現状、デジタルに偏りすぎたことで揺り戻しも起きている。個人的に日本の移動型図書館は良いサービスだと思う。北欧の事例をそのまま活用するのではなく、小松の社会や文化に沿った市民ニーズに合うものができていくと良いのではないかな。
J V 李	北欧では先進的にデジタル活用に取り組まれてきたこともあり、成果以上に課題もでてきている点が有効だと感じている。北欧の課題は小松モデルでも有益だと考える。ぜひ参考にしていきたい。
吉田氏	北欧のデジタル技術サービス等については、引き続き伺いたい。第2回リビングラボに参加したが、大学生はくつろげる場所などを求めている印象があり若年層のそうした視点を深めていきたい。
J V 李	安岡准教授のコメントにある、小松らしさの定義について、ぜひ議論を深めたい。小松らしさと記載しているが、小松らしさについて、このプロジェクトでしっかり共有する必要があると感じる。ここでは郷土資料をイメージして記載しているが、郷土資料は一般的に古い資料が主になることが多く、若年層には届きにくい課題がある。単に古さだけではない小松らしさとは、蔵書の中でも検討したいと考えていた。
事務局 横山	蔵書計画における「市民ニーズや社会情勢、小松らしさを勘案した」蔵書構成は、資料収集・選定方針とも関連すると考えている。蔵書計画を検討するにあたっては、図書館がどういう役割を担っていくのかを考える必要もある。市政の重要テーマと連動した資料の収集、博物館と連携した地域資料の収集・編集、頻発する災害に備えた「こまつ災害アーカイブ」の導入などにより、小松らしさが生まれるのではないかな。
J V 李	災害アーカイブについては、プロポーザル時から提案をしてきた。頻発している災害を、どのように記録していくのかも含めて、小松独自となると感じている。
安岡氏	オリジナリティのない図書館では勿体無い。小松外からも関心をもってもらうためのニーズは、いくつか挙げられているが、より議論を深めても良いと感じた。

吉田氏	若者視点になるが、“これまで”だけでなく、“これからの小松”という視点も盛り込むのはどうか。これからの小松らしさをつくっていく視点があって良いと感じた。
J V 李	吉田氏が以前実施された、子ども司書クラブの活動における現図書館のBGMづくりでは、子どもたちとのワークショップを通じて制作されたと伺っている。そういった制作のプロセスを記録した映像や途中音源などを書庫にしまうのではなく、多くの人がアクセスできるようにアーカイブ化すると、ライブラリーと言えるようになるのではないかと。今起きていることを資料化できるものは小松市には多くあるように思う。小松らしさについては、市民にも問い続けたい。
事務局 横山	第1回リビングラボの結果で、「小松を知る」というキーワードが多く出たことも小松らしさにつながるように感じた。蔵書計画「地域資料の共創と発信について」にもつながるように感じている。
J V 李	資料作成のためのツールをどう揃えるのかという点について、安岡准教授からコメントいただいている。ツールや環境について北欧に限らず、事例などがあれば伺いたい。
安岡氏	吉田氏の「これまでの蓄積ではなく、未来に向けてつくっていく動き」という視点は非常に大切だと感じた。 アメリカでは、図書館に自分で本を作れる施設が併設されている例がある。これと同様に、身体や五感を使って、文字情報だけでなく映像や音声情報の“学ぶ”“知る”を支える環境があっても良いのではないかと。ポッドキャストスタジオやファブラボ、小松のお囃子などの音声サンプリングができるような音楽スタジオなどの環境ツールがあっても良いのではないかと。北欧では音声や音楽、ものづくり、3Dプリンターなどを揃えている施設が多く存在することも特徴的である。
J V 李	日本でもデジタルファブリケーションを取り揃える施設が増えている。ただし、「なぜ図書館に必要なのか」と問われると、実施している人々もなかなか答えにくい状況。かつての図書館は、本を読むことで情報を得る場所だったが、データを活用して自分でもものを作ることが可能になった。この変化を理解し、情報やデータがメディアを通じて拡張している実際の事例を説明することができれば、デジタルファブリケーションの図書館への導入の意義をより多くの人に伝えやすくなるように感じた。

資料2に基づき、J Vより説明。

【主な質疑応答・意見交換】

安岡氏	今回の資料には、多くのアイデアが組み込まれており、これらはワークショップやヒアリングを通じて集約されているものと感じた。
-----	--

J V 李	ワークショップやヒアリングで出てきたアイデアも多く反映している。博物館からのヒアリングを通じて参考資料も提供いただき、計画に活かしている。 また、先週行われたリビングラボでは、博物館を中心とした非常にユニークで実現意欲の高いアイデアが多数出され、それらをできる限り計画に反映させている。
安岡氏	多くのアイデアが盛り込まれており、様々な取り組みが実現可能だと思うが、誰がそれを実行し、マネジメントしていくのかが気になった。大学や学校連携が重要な鍵になると感じるが、ピクニックのアイデアなど具体的な活動を実現・継続するためには、学芸員や図書館員だけでは難しく、外部の民間の協力が必要。民間の関わりが長期的に続くかどうか、またそれが地域に根付くものとなるかが懸念点であると感じた。 リビングラボの役割は、枠組みや舞台を提供し、様々な人が何かをやりたいと思ったときに、そのアクティビティを実現できる環境を整えることだと考えている。小松市のリビングラボも、個々の思いを持った人々が、資金集めや仲間の募集、場所の活用方法がわからないという課題を解決するための支援を提供することが、その本来の役割ではないかと感じている。
吉田氏	リビングラボに参加し、図書館と博物館の役割の違いを通じて、博物館の要素を取り入れることが難しいと感じた点や、図書館に比べて博物館の利用頻度が少ないといった意見がでていた。一般市民が有料で博物館の資料を見に来るかといった点については疑問があり、歴史や災害の資料が揃っていても関心を引くのは難しいのではないかと感じる。これからの博物館の在り方について、戦争時代の資料のように真実を伝える意義がある一方で、一般市民の興味を引き出すキュレーションが重要だと感じている。 過去の災害に関する資料を市民に見てもらうためには、インパクトのあるポスターなどでアピールし、「これまでに何が起きたか、これからどう備えるべきか」を知ってもらうことが重要。温故知新の観点から、博物館側がこれまでの資料を市民に届ける企画やキュレーションを強く推進すべきだと感じている。多くの資料を十分に活用する機会がないのはもったいない。有料展示という点や組織的な難しさもあり、どうすれば市民が気軽に資料に触れ、楽しんでもらえるかが課題。展示や企画によりアクセスしやすくする方法が求められている。
J V 李	歴史資料や民俗資料を中心に展示することは、集客面に課題があると認識している。しかし、今回の未来型図書館との融合によって、この課題を乗り越えるチャンスがあると考えている。従来の博物館のアプローチではなく、例えば音源や映像などの現代的な要素を組み合わせる「リミックス」のような試みが重要だと感じている。こうした新しいタッチポイントを通じて、博物館をより身近なものにする取り組みが大事だと考えている。

吉田氏	博物館における新しい試みとして、現代の人物に焦点を当てた「人物図鑑」のようなコンセプトは面白いと感じた。過去の偉人ではなく、今生きて活動している人たちを取り上げることで、博物館のタッチポイントが変わり、より多くの人に興味を持ってもらえる可能性がある。このアイデアは複数のグループからも出ており、非常に良い方向性だと感じた。
事務局 中山	市長が9月議会の答弁において、リビングラボの活動は非常に活発化しており、開館後にはリビングラボは地域づくりや課題解決の場にしていきたいと述べられた。また、リビングラボを通じて、市民のみなさんの潜在意識にある「こういう活動をしたい」「こういう小松にしたい」ということが可視化できてきたとも述べられており、リビングラボを通じてその思いをカタチや活動にできる場を提供することが重要だと感じた。また、リビングラボが人々を繋ぎ、資金面のサポートを受ける方法など、活動のための必要な人材や情報、手段、場所を提供する「中核的な役割」を果たすべきだと考えており、今後は、こうした仕組みをしっかりと整備し、フレームワークを構築していく必要があると考えている。
事務局 竹内	昨年度、安岡准教授にも参加いただいた、オンラインプラットフォーム「イマキク」を活用した昨年度の第5回のリビングラボの経験から、時間や場所の制約がある方々にも意見を聞くことが重要だと感じた。現在、まちづくりの分野でもオンラインを活用した共創プラットフォームが進んでおり、今年度は出張リビングラボとして中高生の意見収集や、一般市民向けの意見収集をオンラインで行う予定。ただし、現状のツールでは市民同士がインターネット上で意見交換する機能がないため、今後も他の先進事例を参考にしつつ、研究・検討を続けていきたい。
安岡氏	デジタル化できる可能性は何かあるかを常々考えているが、デジタルツールは現実社会のサポートとして非常に有用であり、人間のスキルをスケールすることにも繋がる。共創プラットフォームのような取り組みはまだ模索中の段階ではあるものの、様々な実験や試行を通じてその可能性を探っていくことが重要であり、今後の展開に大いに興味を持っている。
事務局 横山	誰がこのプロジェクトを推進するのかという点について、司書や学芸員だけでは運営が難しいことは理解している。また、プロデューサー的な人材を配置することで解決するものでもない。学芸員などの専門性を活かし、市民参加できる仕組みが必要であり、そうした仕組みをしっかりと整えたい。
安岡氏	デンマークにおける市民参加の進展の背景は、整備された仕組みにある。特に「アソシエーション（Association）」という制度は、市民活動を促進するために大きな役割を果たしている。具体的には、5人以上が集まれば団体として公式に認定され、その団体にはいくつかの特典が与えられる。例えば、銀行口座の開設や公共施設を安価で利用できる権利が含まれ、学校の講堂や体育館を借りるなど、使いやすい環境が整えられている。

	また、こうした団体は民間や公共のファンドにアクセスでき、小規模ながらも50万円から100万円程度の資金を得ることが可能。この資金は、団体がイベントやプロジェクトを実施する際に大いに役立つ。1人では困難な活動も、5人が集まれば団体としての恩恵を受け、活動の規模が自然に広がる仕組みとなっている。この「5人」という基準は、参加のハードルを下げ、同じ志を持つ人々が集まりやすくなる点が非常に効果的。 このように、デンマークの制度では資金調達や仲間集め、施設確保といった活動の障壁を大幅に軽減している。その結果、市民は気軽にプロジェクトを開始できるため、参加意欲が高まりやすくなる。日本でもこうした制度を参考にすることで、市民が主体的に地域活動に参加し、地域全体が活性化する可能性があると考えられる。 「仕組み」やその「デザイン」は、市民の活動を支える基盤として極めて重要であり、このような制度が日本でも導入されれば、地域社会の活性化や市民活動の発展に寄与するのではないかと。
--	---

(2) 第1回リビングラボオンライン開催報告及び第2回リビングラボ開催速報
資料3に基づき、J Vより説明。

安岡氏	オンライン開催の結果では「小松を知る」との意見が多かった印象があるが、その理由について何か思い当たるところはあるか。
J V 李	今回の参加者には、前回も参加した方もおり、特に自分の関心に引き寄せた意見を出される方が多かったと感じられる。 グループBでは「超小松！めっちゃ小松」というテーマのもと、小松に関連する多様な意見が集まり、バラエティ豊かなディスカッションが展開された。参加者の中には、小松について知るだけでなく、より特色を持った形で検討を深めたいという意識が見られ、その思いが今回の結果に結びついたと考えられる。

資料4に基づき、J Vより説明。

吉田氏	参加者の年齢層によって、意見が違ふことを強く感じた。大学生はリラックスできる雰囲気に行きやすさを求めているが、高齢者は昭和感を求めるなど、様々な意見が見られた。非常に有意義に感じた一方で、様々なアイデアや想いをまとめる難しさも感じた。
安岡氏	アクティブに参加されていることが伝わる報告だった。継続していくことの重要性を感じた。なぜここまで人が集まるのか秘訣があれば伺いたい。
事務局 中山	リビングラボなどについては、SNSや様々な媒体を活用して情報発信を行っている。また、リビングラボの参加者には、友人などに声をかけてくださっている方もいらっしゃる、広がりを見せていることを実感している。また参加者が自身のSNSなどでリビングラボに参加した感想などを発信してくださっ

	ており、市民のみなさんのチカラによって未来型図書館づくりの輪が広がっていると感じている。
--	--

資料5に基づき、ＪＶより説明。

事務局 中山	市のホームページにて募集を開始。前回のオンライン開催やリアル開催が楽しかったとの感想もいただいております、リピーターの方の応募も多い。
ＪＶ 西谷	本開催では１グループあたりの人数が多かったが、オンラインではもう少し少人数であったため、じっくり話ができて楽しかったという意見が出ている。

（３）第３回リビングラボ企画案について

【資料３―１】 【資料３―２】に基づき、事務局ＪＶより説明。

事務局 中山	ショートレクチャーの部分について、第１回・第２回の振り返りの後に、９月議会で報告する未来型図書館の核となる図書館機能と想定する事業範囲の考え方や方向性について、第３回リビングラボにおいても市民のみなさんに共有したい。
ＪＶ 有尾	承知した。
安岡氏	ぜひリビングラボに参加したい。グループワークの時間が十分に取られ、参加者の経験も蓄積されている様子が伺える。今後の報告やフィードバックを楽しみにしている。
吉田氏	ワークの内容は非常に楽しみだが、周辺には芦城公園もあるため、公園との一体的な整備の視点についてもぜひ考慮してほしいと考えている。

そのほか、事務局より報告。

事務局 中山	未来型図書館の建設予定地近隣の高校で、文化祭の際に、学校図書室に未来予想図の拡大パネルを展示し、生徒のみなさんに未来型図書館に関するアイデアやコメントの記載をお願いした。中には、「飲食店が欲しい」といった意見や公会堂に関する意見も寄せられた。公会堂については、過去の歴史やみなさんの思い出を大切にしながら、新たに整備される未来型図書館においてもたくさんの思い出を作っていただけるような施設を目指していきたい。今後もリビングラボや様々な工夫を通じて、ティーンズ世代の声も反映した施設づくりを進めていきたい。
-----------	--

終わりに、各アドバイザーより一言コメントをいただいた。

安岡氏	海外であり遠隔ではあるが、今後も何ができるかを考え、もっと小松市や事業について知っていきたいと思っている。毎回、アドバイザーの方などの専門的な知見や各資料などから多くの学びがある。
-----	--

吉田氏	勉強になることが多く、他の方々と意見を交わし、想像を重ねることで多くのことを得ており、次回も楽しみにしている。
-----	---

次回、第4回アドバイザリーボードは11月に開催予定。

以上